

北海道札幌北高校
探究学習

探究学習の手法を採り入れて
教育活動を充実させ、
自立した学習者を育成

変革のステップ

背景と課題

- 生徒の学習姿勢が受け身で、自分で学びを設計する力に課題があった。加えて、コミュニケーション能力に不安がある生徒が少なかった

実践内容

- 「自立した学習者」を1学年の目標に設定 2020年度の1学年では、学年目標を「自立した学習者」とし、学年集会や学年通信を通じて、「自ら課題を見つけ」「問いを立て」「課題を解決する」ことの大切さを生徒に伝え続ける
- 探究学習の充実 「総合的な探究の時間」で行う探究学習では、課題発見力や課題解決力などの育成を目指し、活動を行う
- 道徳教育の推進 対話を重視した道徳教育をスタート。ICTを活用して生徒の内面の変容を可視化することで、成果を生徒と教師の間で共有

成果と展望

- 講演会で講師への質問が増えるなど、課題発見力が高まる。家庭での学習習慣が定着した生徒が増加
- 今後は、3年間の教育活動の計画に育成を目指す資質・能力をひもづけ、各活動のねらいをより明確にする

PROFILE



北海道庁立札幌高等女学校として開校。校訓は、「寛容・進取・良識」。ポートフォリオの活用、育成を目指す資質・能力の策定などにより、指導改善を推進。海外短期研修など、国際理解教育にも力を入れている。

設立	1902 (明治 35) 年
形態	全日制・定時制/普通科/共学
生徒数	1 学年約 320 人 (全日制)

2020 年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、旭川医科大、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、札幌医科大などに 283 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ 287 人が合格。

住所	〒001-0025 北海道札幌市北区北 25 条西 11
電話	011-736-3191
Web site	http://www.sapporokita.hokkaido-c.ed.jp

資質・能力を育成する必要性への理解が
A-Lの実践研究を機に深まる

道内有数の伝統校である北海道札幌北高校は、生徒の希望進路の実現という従来の目標はそのままに、探究学習の充実、育成を目指す資質・能力の策定など、新学習指導要領に基づいた教育活動へと変革を加速させている。その第一歩となったのが、2016年度、文部科学省の研究指定(*1)を受けて行ったアクティブ・ラーニング(以下、A-L)の視点の授業改善だった。1学年主任の中道洋友先生は、その実践研究が教師の意識を変化させたと振り返る。

「A-Lの視点を取り入れた授業は、本校が行ってきた教科指導を否定するものではない

*1 文部科学省「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」。

く、大学入試改革の動向や近年の各大学の出題傾向に鑑みると、むしろ、希望進路の実現という目標達成のために背中を押すものだと分かりました。実践研究を通じて、新学習指導要領で示された資質・能力を育成する必要への理解が、学校全体で深まりました」

18年度には、全教師参加のワークショップを実施し、5～6人のグループで出した意見を教務部が集約して、自校で育成を目指す16の資質・能力を策定した(図1)。

「本校は、ここ数年で教師の顔触れが大きく変わり、先輩教師から受け継いできたよき伝統を次代に継承する必要があります。そ



教育相談部、道徳教育推進教師

亀谷千代仁 かめや・ちよひと

教職歴37年。同校に赴任して15年目。理科(化学)。「この高校生も皆同じ。いつ学びの大切さに気づくかで、将来は異なる」

1学年主任

中道洋友 なかみち・ようゆう

教職歴29年。同校に赴任して14年目。理科(物理)。「不思議を探そう。始まれば終わるとりあえず前へ」

総務部

前田健太郎 まえだ・けんたろう

教職歴23年。同校に赴任して4年目。情報科。「経験だけでなく、データから課題を見つけて改善する」

進路指導部

鈴木伸也 すずき・しんや

教職歴18年。同校に赴任して3年目。数学科。「生徒とともに日々成長する」

図1 育成を目指す16の資質・能力

<p>① [知識及び技能]の習得 何を理解しているか、何ができるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の知識・技能 異文化の理解 多様性の理解 傾聴する技能 コミュニケーションの技能 情報を扱う技能
<p>② [思考力・判断力・表現力等]の育成 理解していることをどう使うか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 論理的・批判的・創造的思考力 課題を発見・解決する力 情報を分析・判断する力 表現する力
<p>③ [学びに向かう力・人間性等]の涵養 どのように社会・世界とかわり、よりよい人生を送るか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に実践する力 自己を理解し管理する力 他者と協働する力 社会を多角的に見る力 責任感 健康を保持・増進する力

* 学校資料を基に編集部で作成。

うした状況の中で実施したワークショップは、本校が大切にしてきた教育観を教師間で再確認する場になりました。育成を目指す資質・能力が明確になったため、教育活動の新規計画や見直しの際にも、目標の設定や、共有・浸透がスムーズに進むようになりました」(中道先生)

オンラインで行った発表会の見学振り返りの充実で気づきを促す

20年度の1学年では、「自立した学習者」を目標に掲げた。

「本校には、中学校時代まで受け身の学習をしてきた生徒が少なからずいて、自分で学びを設計する力に課題がありました。目標で掲げた『自立』とは、『自ら課題を見つけ』

『問いを立て』『課題を解決する』ことであり、16の『資質・能力』の中に位置づけられています」(中道先生)

学年集会や学年通信では、例えば、学校行事のどの場面が自立につながるのか、取り組む際にはどういった心構えが必要なのかを説明。さらに、取り組みを自分事として捉えられるよう、「行事に没頭できたが、こんな反省点があった」といった生徒の声も盛り込むようにした。

そして、17年度に中道先生が学年主任を務めた2学年でスタートさせた探究学習を、資質・能力の育成を意識した活動へと進化させた。「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で行われる探究学習は、1学年では、生徒が4～6人ずつの班となり、各班でテーマを決めて調査研究に取り組み、2月にポスター発表を行う。

20年度は、先輩の研究を手本にしておおくと、12月に体育館で行われる2年生のポスター発表会を、1年生にも見学させる計画を立てていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、発表会の2週間前に見学の方法を再検討。2年生の約80班の中から事前に研究内容の質が高い2班に絞り、体育館で行うその2班の発表をオンライン会議ツールで各教室に同時配信し、1年生はスクリーン越しに視聴した。

「生徒は大きな画面に見入り、発表を集中して聞いていました。教室間の移動がなく、振り返りに多くの時間を充てられたことはメリットだったと感じています。その場で質疑

応答ができないという問題はありましたが、振り返りシートに『自分が質問するしたら』という項目を設け、疑問点を挙げさせました。自分なりに疑問点を出し、気づきを得るという体験の積み重ねが、『課題発見力』や『問いを立てる力』につながると期待しています（中道先生）

そうした生徒の批判的思考力などを数値で把握するため、「GPS-Academic」（*2）を年1回実施。学年通信でも思考力の重要性を解説し、生徒に帳票を熟読させている。

「生徒には、論理的・批判的に物事を捉える力が問題発見につながると伝えています。20年度の帳票返却時には、協働的思考力の大切さを実感させようと、チーム・ビルディングのためのゲーム『マッシュマロチャレンジ』（*3）を行いました。思考力の大切さを理解すれば、探究学習に取り組む意欲も高まると考えています」（中道先生）

ワールドカフェを導入した道徳学習で対話と多様性の大切さを知る

20年度の1学年では、思考力や協働性の育成の一環として道徳教育にも力を入れている。19年度、亀谷千代仁先生を中心に、道徳の研究会に参加するなどして実践のあり方を模索。道徳教育の目的である道徳的判断力や心情、実践意欲・態度を養うためには、物事の本質や価値、あり方を論理的に明らかにする探究

学習の方法が有効と考え、総合探究で行うことにした。道徳教育を探究学習に融合させるために採り入れたのが、ワールドカフェ（*4）だ。

「本校には、中学校時代に周囲に遠慮して自分の意見が言えなかった経験があるなど、他者とのコミュニケーションに不安を持つ生徒が少なくありません。そこで、ワールドカフェを導入することで安心・安全の場をつくり、答えが1つではないテーマについて考えを出し合う活動を通じて、自身の思考を深めるとともに、仲間とのコミュニケーションに自信を持てるようになることを目指しました。また、その過程で、対話の醍醐味を感じてもらおうことを期待しました」（亀谷先生）

20年11月には、「新渡戸稲造の生涯を知り、自身の人生観・世界観・価値観を見つめる」をテーマとした道徳の学習を行った。事前に新渡戸の人生と国際貢献についてまとめた資料を読み、ワールドカフェ形式でグループのメンバーを替えながら語り合った。

「クラスメートと政治や哲学などの切り口から話をしたくてもできなかった生徒や、考えが他者と違うことに悩んでいた生徒も、自

図2 道徳の学習のワークシート（抜粋）

1 新渡戸稲造の人生を学び自分の人生観、世界観、価値観を見つめてみよう				
	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的実践意欲と態度	自己理解
授業前	どのよきな感動や気持ちを持ちましたか。	どのよきな考えを持ちましたか。	自分のよきな人生観や世界観を教えてください。	自分のよきな価値観を教えてください。
授業中	どのよきな感動や気持ちを持ちましたか。	どのよきな考えを持ちましたか。	自分のよきな人生観や世界観を教えてください。	自分のよきな価値観を教えてください。
授業後	最終の話を聞いて、感動や気持ちにどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、自分の考えや自分のよきな価値観にどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、人生観や世界観にどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、自分のよきな価値観にどのような変化が生じましたか。

「道徳的心情」「道徳的判断力」「道徳的実践意欲と態度」「自己理解」「他者理解」の5項目について、授業前（資料を読んだ後）・授業中・授業後（授業の数日後）に自身が考えたことや感じたことを書き込んだ。
* 学校資料を一部改訂・抜粋して掲載。

分の考えを堂々と発言する経験によって自信をつけることができたようです。また、同じ学校に通う生徒でも、考えは多様であることを実感したと思います。ワークシートには、『人生の意義を学べた』『初めて自分の考えが深まり、よい方向に変わっていくことを感じた』といった感想が書かれており、道徳教育の目的である内面的資質の変容を実感している様子が見られました」（亀谷先生）

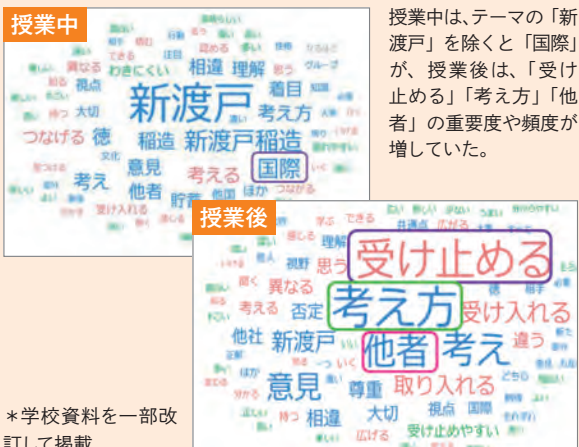
テキストマイニングで生徒の内面の質的変容を可視化

今回の道徳の学習では、生徒の内面的変容をICTを活用して可視化した。生徒は、授業前・

*2 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。 *3 マッシュマロと乾燥パスタを使ってタワーを作るチーム・ビルディングの手法。 *4 話し合いの手法の1つ。参加者が小グループに分かれて話し合った後、指定の時間になったら各グループ1人を除いて、新しいグループを構成し、同じテーマで話し合う。その際、残った1人が前のグループで話し合った内容を新たなグループのメンバーと共有する。そうした活動を繰り返し、最後に元のグループに戻って、それぞれが話し合ってきた内容を共有する。

図3

「自己理解」のテキストマイニングの結果



*学校資料を一部改訂して掲載。

授業中・授業後の各段階における道徳的心情（自分の気持ち）、道徳的判断力（自分の考え）などを、ワークシート（図2）に記入。そのテキストを「情報」の授業で、共同研究をしている「Classi」（*5）に入力させて、タグクラウド機能（*6）でテキストマイニングによる分析を行った。その結果として、単語の重要度（文章の特徴を表す単語）と出現頻度（単語の使用数）が文字の大きさで表された（図3）。

さらに、亀谷先生が作成する道徳教育の補助教材「ML通信」で、授業前・授業中・授業後に出現した単語の変化を、生徒のワークシートにコメントとともに紹介した。亀谷先生とともにデータ分析を担当した、情報科の前田健太郎先

生は、次のように語る。

「例えば、道徳的心情を見ると、授業前では『感動』が目立っていたのに対して、授業中は『徳』『貯蓄』などの単語が現れていました。それは、『感動しました』といった漠然とした記述から、『徳の貯蓄が備わってこそ、自分のやりたいことができる』『徳の貯蓄は、目に見えないが重要である』などと、自分が考えたことを表すコメントへと変容していったためです。生徒の考えを言語化し、時系列で記録させることで、学習過程による内面の変化を追うことができ、思考の深化や新しい視点の獲得など、学びの成果が可視化されました。それによって、生徒と教師の間で成果が共有しやすくなったことは、大きな意義があると思っています」

**伝統的な進路学習にも
探究学習の手法を採り入れる**

同校は、長年継続してきた進路学習の改善にも力を入れている。90年代半ばから続く「AGE16」は、将来への視野を広げて進路意識を高めるとともに、進路情報の収集方法を身につけることを目的とし、1年生が夏季休業中に大学・学部・学科調べを行い、レポートにまとめる取り組みだ。それを探究学習の一環に位置づけて進化させた。進路指導部の鈴木伸也先生は、改善点を次のように語る。

「個人ワークに加えて、4〜5人のグルー

プでレポートを見せ合う相互評価と、各グループの代表者がクラスで発表する活動を行い、思考力や表現力、協働性の育成にもつなげています。伝統を受け継ぎつつ、時代の要請に応じて活動を変化させていくことが、形骸化を防ぐためにも大切だと考えています」

20年度の1学年が入学してから約1年が経った。臨時休業や学校行事の中止などを乗り越えて、生徒は大きく成長している。例えば、20年12月に総合探究で行われた外部講師による職業講話「プロフェッショナル講座」では、以前に比べて、生徒から講師への質問数が増え、社会問題に迫る質問も見られた。漫然と話を聞くのではなく、課題意識を持ち、批判的な視点で講師の話をつまえているからこそ、そうした質問ができるようになったのだろう。

また、家庭での学習習慣が定着している生徒が多く、生徒のアンケートでは、「計画的に学習できた」「うまくいかなかった時にも計画を修正できた」といった回答が増加傾向にあるという。

今後の課題は、16の資質・能力を3年間の教育活動の計画に落とし込むことだ。各活動と16の資質・能力の関係を明確にすることで、活動の質を高めたいと、中道先生は語る。

「卒業までの2年間、教科指導や学校行事など、生徒の成長につながる場面を16の資質・能力とひもづけながら、できるだけ多く設けていきたいと考えています」

*5 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*6 コンテンツの属性や内容を表すタグ（目印となるキーワード）を集め、一覧表示したもの。